
彼方へ届く、幻想曲。

霜月真希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼方へ届く、幻想曲。

【Nコード】

N6512Y

【作者名】

霜月真希

【あらすじ】

この小説の主人公は怪盗メロディー。彼女の次のお宝は、佐久間家が所有している『虹色のダイヤモンド』。だが、ある組織が彼女の前に現れる。自ら『風林火山』と名乗るその組織は、宝石を盗むのを辞めさせようとするのだが。

これは、異能者の繰り広げる、幻想の曲。

（これは、他サイトで自分が書いている小説を、大分改稿したもの

です。キャラクター名前の表記など変わっているところがあります
が、本人ですのでご了承ください（

始め

薄暗く静かな夜に、バイオリンの音が流れ出す。
綺麗なそのメロディーが流れてるのは、ある豪邸の一室。二十人ばかりの警察が、その音に驚き、辺りを見渡す。

その刹那、

強風が起こった。

警察がその風に驚き、床に顔を伏せる。 その時、

「お馬鹿な警察さん。今宵も宝石盗みに来たわよ」

透き通るような綺麗な声が、警察に取り巻かれてた宝石のケースの上から聞こえてきた。

長い栗色のポニーテールを揺らしながら、十七歳ぐらいの少女は口元に微笑を浮かべる。

その少女の手には、キラキラに輝く宝石が握られていた。

「来たな！ 怪盗 メロディー！！ 待ってたぞ」

宝石を持ち、勝利を背にしていた少女は、後ろから浴びせられた声に口元を歪めて後ろを向く。

そこには、四十歳位の男が、古びたスーツを着ながら立っていた。

「貴様の周りはすべて周囲した！ 逃げ場は無いぞ！！」

何時の間にか、少女の周りには三十人ばかりの男の警官が、取り

巻いていた。

絶体絶命　男からいわせると　のこの状況でも、少女は口元をほころばせている。

「何だ？　何がおかしい！！」

その微笑に気づき、凄い迫力で男が怒鳴る。

男からの殺気が見えないのか、少女は声に出してクスクスと笑った。

「お馬鹿な警察さん。私をこれで追い詰めたつもりなのかしら？」

「何がおかしい！　こんな状況で逃げ延びた者は一人もおらんぞ！！」

「だからだわ。貴方達に私を捕まえることなど出来ない。だって、勝利するのは、わ、た、し」

少女は相手の男を見すえ、改めて微笑みかける。それを見た男は憤激し、

「か、かかれ　！」

周りの警官に一言をかけると、自ら少女に向かっていく。後からは、警官たちが少女にめがけてどんどん飛びかかって行った。

「ふふつ。本当に、お、ば、か、さん」

少女は呟くと、上に跳んだ。その時、窓が音を立てて開き、強風が入ってくる。

その風に警官が飛ばされ、入り口の方にある扉に無様に激突した。

「メルシー、警察の皆さん。ごきげんよう」

少女は窓に立ち、振り返って言った。栗色のポニーテールが、風になびく。だが、月からの逆光で表情は伺えない。

そして少女が口が三日月形に開いた、その時　そこには、もう、少女はいなかった。

そこにあつたのは、風になびく豪華なカーテンだけだった。

大きくそびえ立つビル、そこに少女は立っている。栗色の髪をなびかせ、つきを背に、町の騒がしい一角を見つめて　。

「あーあ、終わったわ。呆気なかったわね」

「……そうだな。簡単すぎる」

少女が口を開くと、何時もまにか側に立っていた少年が、少女の問いに答えた。

全身黒ずくめの服装をした、彼女と同じ年ぐらいの少年だ。

「ふふつ。今度はもうちょっと楽しい所にしましょ。たとえば」

いったん言葉を切ると、少女は、少年の耳に口を近づけると何かを呟いた。

少年は、無表情でそれを聞いてたが、その顔がいつぺん、微笑んだように歪んだ。だがそれは一瞬の事で、すぐに無表情に戻る。

「じゃあ、散!！」

少女がそういった刹那、二人の姿はもう、そこには存在しなかった。

後に残されていたのは、自然にそよめく風のみだった。

(1) 私立幻想学園

私立幻想学園。

ここは、不思議な力

いわゆる所謂異能力を持ったものが集う学園。

初等部、中等部、高等部があり、その中でも高等部には力も実力も能力も選ばれた最高の物たちが通っている。途中に入ってきたり出て行く者達があとを絶たず、この高等部に通っている生徒のちゃんとした数を知っているのは、この学園の学園長か数人の教師ぐらいだろう。

そんなゴツチャゴツチャな高等部の中に、あまり目立たない平凡な顔立ちの女子がいた。

栗色の髪の毛をサイドで三つ編みをして、瞳は髪の毛と同じ薄めの栗色。その瞳を隠すように紫色のメガネをかけている。

彼女は無表情で友情と呼べるものはあまりいない。

頭脳明晰で、成績は学年二位。持っている能力は軽業だが、そのことを知っているのはほんの一握りの先生や学園長ぐらいだろう。もちろん、生徒で知っているのは二人を除いて誰もいない。

いつも教室の隅に潜んでおり、人と関わらず、何を考えているのか分からないといわれている少女 野崎唄^{のよきうた}は、今日もまたひっそりと学園に登校してきていた。

スクールバックを両手で持ち、野崎唄はゆっくりとした足取りで学園の門を潜り抜けて中に入った。

挨拶をしてくる先生に軽く会釈をすると、誰とも口を交わさずに

下駄箱に向かう。そして、下駄箱でローファアを中履きに履き替えると、自分の教室がある階へと階段を登って行った。

学園の校舎は三棟ある。^{さんむね}初等部のある五階建ての校舎、中等部のある四階建ての校舎、そして唄の通う高等部のある五階建ての校舎だ。彼女のクラスはそのクラスの三階の一番端　階段を上つてすぐのところにある。

三回にある『2・A』という札がかかっている教室の前まで来ると、後ろの扉をゆっくりと開け、唄は中に入っていた。クラスの中には大勢の人がいるが、唄に気づくものは一人もない。

一つため息をつく、窓側の一番後ろの席　自分の席に向かつて行った。

席につくと、唄は頬杖をつき、冷ややかな目線で周りでザワザワとうるさく群れているクラスメイトを見た。耳が痛くなるほどうるさすぎる光景だ。

それにしても、唄は思った。

人はすぐ人と群れたがる。傷つくのが嫌だとか言いながら、いつも集団でいる人が多い。そして、こうやってうるさくギャアギャアと騒ぎ立てる。

これのどこが楽しいのか。

一人になるのが嫌？　イジメられるのが嫌？　だから人のご機嫌をとりつつ、いつもペテン師の如く人と接するの？

首を振って、唄は周囲にいる人と今の考えを頭の外に閉め出す。

そのとき、

「一人のほうがいいと思ってる割には、なぜ僕らと関わるのか……。いつも僕は不思議に思っているのだけどね」

唄の前から声が聞こえてきた。男子にしてはちょっと高めの皮肉めいた声だ。

前を向いて、唄はため息をつく。

そこには、片手に本を持ちながら後ろを向いている、黒髪でこれ

また黒のメガネをかけている男子がいた。何の感情も浮かんではない無表情で見てくる。

「貴方は私のパートナー。だから一緒にいるだけよ、風羽^{ふう}」

「確かに、それもそうだね」

風羽こと喜多野風羽^{きたの}は、唄から目線を外すと、背を向けたまま本を読み出した。

（いつもいつも……こいつは、いったい何を考えているのかしら？）
唄はため息をつく。

この質問を浴びせられたのはこれで何回目だろうか。もう答えなどわかりきっているはずなのに、意味がわからないっいたらありやしない。

「ところで、今度の獲物は、本当にアレにするのかい？」

不意に、風羽は本に目線を落としたまま、静かに尋ねてきた。

唄は眉を寄せると、机に肘をつく。

「当たり前前に決まってるでしょ」

「僕たちがいるから大丈夫だと思うが……」

メガネを直しながら風羽は呟くと、本から目線を話して唄を見てきた。その口元が少し歪んでいる。

「まあ、それもそうだね。確かに、怪盗メロディーには不可能はない、か」

彼はさらりとトップシークレットをいうと、本に目線を落とした。（こいつは、なんでこうやすやすと、人が大勢いるところでさうりと言ってくるのかしら）

チラリとクラスの中を見渡すが、どうやらみんなは話し合いに忙しいらしく、さっきの言葉は聞こえていなかったようだ。まあ、風羽はそれを見越して言ってきたいるのだが。

唄が大きくため息をついた。その時、

「おはようさん、唄。今日も元気か？」

横から、すぐくのんきな声が聞こえてきた。

その呼びかけを唄は無視する。この声、この口調……。見ないで

も誰だか一目瞭然だ。

「唄、無視するなよな。俺はすつごくショックだぜ」
なあなあと、その声はうるさく声をかけてくる。

(うるさい)

唄はしびれを切らすと、すごい眼力で横を向く。すると、横にいた男子生徒は、ピタツと言葉を止めた。

唄が向いた先、そこには 茶髪のはねた髪の毛をした一見しただけで不真面目に見える、風羽より背が低い男子生徒がいた。両手を肩ぐらいで広げて固まっている。

「何かようかしら、ヒカリ？」

冷たいこえて歌がいうと、中澤^{なかざわ}ヒカリは重々しい口を開いた。

「いや……ただ、挨拶をしにきただけで……なあ、風羽？」

ヒカリは救いを求めるかのように風羽を見るが、風羽は何の反応もない。それを見てヒカリは肩の力を抜くと、唄に背を向けた。

「放課後、いつものところに来いと、アイツが呼んでたぜ」

そして一言残していくと、この場を後にした。

唄がそれについて何かを問う前に、ヒカリは後ろの出入り口の近くの自分の席に突っ伏していた。

(あいつが私を呼んでいた、か。いったい何があるのかしら。いつもは私が呼ぶのに……)

まあ、どうでもいいか、と唄が小さい声で呟いたとき、ちょうどホームルーム開始のチャイムが鳴った。

(2) バトミントン対決・上

幻想学園の授業には、一つだけ他の異能学校とは違う授業がある。
その名も ? 自由体育?。

それは、名のとおり自由にできる体育である。簡単に説明すれば、それぞれの個性にあつた競技を色々な人と対決したりすることのできるものだ。もちろん異能を使うこともでき、半ば遊びの授業なのに時たま真剣勝負が勃発することもある。そして、2 Aの月曜日
唄たちの一時間目は、その授業であつた。

「 で? 君が僕と一緒にバトミントンをやるだなんて、いった
いどういふ了見^{りようけん}だい? 」

すっかり体操着姿になつた風羽がメガネを直しながら口を開いた。
その前で、まだ九月の終わりぐらいだというのに上下ジャージ姿
になっている唄が、傍から見ると分らない笑みを口元に浮かべると、
「私たち、あまりバトミントンはしたことなかったわよね? だから、
久々にやってみようとしただけよ」

ラケットを手の中で弄びながら答える。

ここは、広い運動場の隅にあるコートの一つ。

唄たちは真ん中にあるネットを挟んで向かい合っていた。左右にも
コートがあるが、彼女らを避けだろつか、そこには誰もいない。

そして、少し離れた所では、男子たちがサッカーをしていた。その
中に、ヒカリもいた。

彼の周りでは大きなざわめきが起こっているが、対照的に唄たちの周りはとても静かだった。まるで、周りに音を断絶する何かがあるような。

「君が、僕に勝てるとは思わないけど」

風羽がメガネ越しに無表情の瞳を向けてきた。

「何か勝算でもあるのかい？」

「無いわよ」

唄はそつげなく答える。

「ただ、貴方とやってみたかっただけ」

「……君は、僕的能力を知ってるよね？ それなのにやろうだななんて、もしかして君は馬鹿なのかい？」

はあ、と大きくため息をつく、風羽は徐に右手を上にあげた。

刹那。その手に、見えない風が集っていく。

「僕は風使い。風の吹き荒れる外は、僕の絶好のテリトリーだ」

そして右手を下に振り下ろすと、どつと強風が辺りに吹き荒れた。風に弄ばれる髪の毛を軽く抑えると、唄は冷たい瞳で風羽を見つめる。

「そんなの今更言われなくても知ってるわよ」

「……ああ、そうだろうね。僕は仮にも君のパートナーなんだから」
「それに私には、軽業がある。運動神経だったら、負ける気はしないわ」

風は、もう治まっていた。

唄は、ラケットをネット越しにいる風羽に向けると、静に張りのある声で告げる。

「早く勝負を始めるわよ！」

コインを指で弾くと、クルクルと2メートルばかり飛び、すぐ落ちてくる。それが手の甲の近くに来たとき、唄は左の手の甲と右の掌の間に挟んだ。

「私は表」

「じゃあ、僕は裏だ」

唄は軽く一回深呼吸して、右手をゆっくりと持ち上げる。そしてコインをチラリと流し目で見と、

「じゃあ、私からね。シャトルを頂戴」

左手を風羽に差し出した。彼は軽く投げ渡してくる。

シャトルを受け取った唄は少し後ろに下がると、ラケットを構えた。風羽もそれに習いラケットを構える。

シューと、二人の間に弱い風が流れたような感じがした。

そして、唄はラケットを下に持っていくと、シャトルに向けて強く打ち付けた。

バトミントン対決の開始だ！！

(3) バドミントン対決・下

「……………はっ！」

帰ってきたシャトルを唄は軽々と返す。その額には、じんわりと汗が滲んでいた。

さすがにこれは、風羽が有利だ。五対三で負けている。

相手は風を使っている、こっちはただ単に身体を軽くするだけ……。

先に十一点入れたほうが勝ちだが、これでは負けてしまうかもしれない。

「よいっしょ！」

また来たシャトルを力強く返す。

打ち返したシャトルは、風羽の後ろ　コートギリギリのところに落ちて行った。

(ギリギリ……。入るかも知れないっ)

唄がそう思った瞬間、一陣の風が吹いた。

その風はシャトルを救うと、風羽のラケットのところに行く。そしてそのまま打ち返され、唄のコートギリギリのところに落ちる。

これで六対三。風羽がリードしている。

(やばいわね。このままでは私が負けてしまう。何とかしなければならぬわ)

唄は前を向いて、小さくため息をついた。

「ちよつと、風羽。何で力を使うのよ。不公平じゃない」

意味のないことはわかっている。だけど、もしかしたらの意を込めて言ってみる。

「何を言ってるんだい？　君だって力を使っているだろう。お互い様じゃないか」

が、やはり無意味だったようだ。

唄はため息をついて風羽から目をそらすと、なんとなくあたりを

見た。すると。

「何よ、あれ」

コートの上に集っている女子が目にはいった。しかも、みんな風羽のコートの方である。

なぜだかわからないが、風羽はモテル。この容姿と、人を近づけない何かが、彼の魅力を引き出しているのかもしれない。

「コートの周りには、結界を張ってたんじゃないの？」

「張ってたよ。でも、この学園は異能者の学校だからね。僕如きが造った結界なんて、すぐ壊されても仕方がないよ」

さも当たり前のことだといわんばかりに言う風羽。その姿がいちいち決まっついていて鬱陶しい。しかも、女子がキヤーキヤー言い出すからたまったもんじゃない。

「喜多野クン。がんばってえ！」

「運動神経と頭の良さしか取り得のない女なんかに負けないでよ」

「にしても、アイツ」

「ガリベンの癖に、何でいつも風羽様と一緒にいるのよ」

風羽様ファンクラブとでもいうのだろうか。女子達から、迷惑以外に他ならない声が発せられる。

（うるさいやつら）

唄は大きいため息をついた。

（風羽なんかの、どこがいいのかしら）

そして、冷やかな目で女子連中を流し見ると、口を開く。

「風羽。とりあえず、結界を張り直し」

「君たち。すまないが、静かにしてくれないかい？ こうつるさすぎては集中できないんだ」

だが、それを風羽に遮られた。

静かな口調で言った風羽にの言葉に、あたりが一瞬でシーンと静まり返る。息の飲む音が聞こえてきそうなほどの静かさだ。

（ついでにどこかへ行つて欲しいわ）

唄はそう思ったが、言っても無駄だとも思ったので、声には出さ

ない。

かわりに、風羽が言葉を発した。

「さて、静かになったところで、続きをやらないかい？」

「ええ、もちろん。やりましょう」

軽く唄は返すとラケットを構える。

（絶対に、勝つわ）

たとえ遊びでも、負けたくない。唄は自身も認める負けず嫌いなのだ。

唄は大きく息を吐くと、ラケットを振り上げた。

キーンコーンカーンコーン

キーンコーンカーンコーン

。

一時間め終了のチャイムが鳴った。唄たち生徒は、自分達が使っていた道具を片付け始める。

結局、さっきの対決は風羽が勝利した。途中から追い上げはしたものの、十一対九で唄の負け。

悔しいものの、唄は自分の使ったラケットやシャトルの片づけをするため、運動場の隅にある倉庫に入った。

「残念だったな。お前、負けたんだろう？ 顔に書いてあるぜ」

その時、との裏側にいたヒカリに声をかけられた。彼は腕を組んで笑みを浮かべている。

「……よく、わかったわね」

チラリと流し目したただけですぐ目をそらすと、唄はぶっきらぼうに答えた。

「俺はお前の幼馴染だぜ。それぐらい、すぐにわかるさ！」

その言葉に反応して唄がヒカリを見ると、彼は胸を張って自信満々な表情をしていた。

「ばかみたい」

それに、唄はそう吐き捨てると、その場から足早に去って行く。

その後姿を、ヒカリがなんともいえない表情で見っていたのを、唄は知らない。

二、三、四時間めと、退屈な時間が過ぎていった。今日は昼前に授業が終わるので、早く帰ることができる。

もちろん、唄もちょっとは嬉しかった。退屈な授業が終わって清々している。

ホームルームも終わり、クラスのみんなはバラバラに帰って行く。ヒカリも、男子を四人ぐらい引き連れて教室から出て行った。

風羽はまだ、席に座って本を読んでいる。その姿を何人かの女子が見ているが、彼は気にしてない。

はぁ、と唄はため息を吐き出すと立ち上がった。と、その時いきなり風羽が後ろを振り向いた。

「ところで、後であそこに行くんだよね？ 僕も行ったほうがいいのかい？」

「ええ、もちろん。貴方は私のパートナーなんだから当然よ」

「まあ、どっち道行くつもりだったんだけどね」

（ならいちいち聞かなくてもいいのに）

唄はそう思ったが口には出さなかった。

再び本に視線を戻した風羽を一瞥すると、唄は教室から出て行く。

(4) もう一人の仲間

暗い室内の中にある水色のラジカセから、バイオリンの美しい旋律が流れた。

この曲は、怪盗メロディーがよく犯行現場に残していく、彼女が作曲した曲。彼女を支援するファンが独自に作詞したものもあるが、そんなごたごたのあるのよりも、詞のないそのままの曲が自分好きだ。

世間でメロディーは、とても美しい少女としてファンがいたりして、ネット上ではサークルとかも建ち上げられている。が、その実体はただの地味少女。怪盗メロディーのときの彼女は綺麗だが、野崎唄のときの彼女は、自分よりも劣っている。

小さな豆電球からでる光のもとで、口元を綻ばせて七星水練《しちせいすいれん》は微笑んだ。

「……はあ。この曲、やっぱり嫌いだわあ。聞いていて、イライラしてくる気がする」

水練は、スカイブルーの瞳を煌かせ、パソコンに目をやる。

そこには煌く宝石が映しだされていた。

（なんであたしがやらへんといかんのや。自分でやればええのに）
ため息をつきながらも、水練はパソコンの操作を続ける。そのとき――。

「お、きたみたいやね。一人で退屈しottaところや。早く、上がってきてくれへんかな」

鉄製の階段から、二人ぐらいの足音が聞こえてきた。その足音の主は、限りなく水練の部屋に向かってきている。

たぶん、あいつらだろう。

コンコンツとドアがノックされた。水練は何の躊躇いもなく返事

する。

「入ってきてええよ。鍵はいつも開いてるんやから」
それに答え、二人の人物が中に入ってきた。

「……………」

無言の状態で入ってきたのは風羽。相変わらず黒っぽい服を着て、感情の浮かんでいない無表情のまま入ってくる。

「やあ、水練。元気だったか？」

その後ろから元気いっぱい、うざいぐらいのにこやかな表情で入って来たのはヒカリ。風羽とは対照的で、赤色のＴシャツという派手な格好をしている。

そのヒカリを見て、水練は大きくため息をついた。

「風羽、なぜヒカリがいるんや？ あと、唄は一緒ではあらへんのか？」

「な、なんだよ。俺がいちゃわりいのか？ これでも、一応お前らの仲間だぜ！」

自慢そうに胸を張りながらヒカリが答えてくるが、水練はそれを無視すると、いまだ無言の風羽を見つめる。彼はめんどくさそうにため息をつく、口を開いた。

「………… ああ。唄は一緒じゃないよ。別に、いつも彼女と一緒にいるわけではないからね。後から繰るんじゃないのかな」

自分には関係のないことだ、とでもいうように風羽は答える。

それを聞き、水練はまた大きなため息をついた。

「やっと、着いたわね。 ったく、父さんたちのせいで、いつもより時間がかかってしまったわ」

一棟の廃墟マンションの前に立ち唄は呟くと、少し乱れている息

を整えながら、目の前にあるマンションを見上げた。

前は綺麗なつくりをしていたのだろう。いまでは、その姿もなれ果てて、ところどころ亀裂があったり、黒ずんでいたりする。窓にはまっている鉄格子もところどころ折れ、窓ガラスはほとんど叩き割られている。

「……ふう」

とため息をつく、唄は鉄製の階段を上っていく。

向かうところは三階の一番右端。

誰も住むことなく何年も忘れ去られてしまったかのようなマンションは、鉄製の階段もボロボロだ。今でも崩れそうで危なっかしいが、唄は軽々と登っていく。

そして、一つのくすんだ茶色のドアの前に立ち、ノブに手を置く
とドアをあける。

ギシッ。

と音がしてドアが開け放たれると、三つの見知った顔に出迎えられた。どうやら、唄が来ることがわかっていたみたいだ。

「やあ、遅かったね」

いつもの無表情で言ってきたのは風羽。

「ヤッホー、唄！」

その隣でうざいぐらいニコニコな笑顔で言ってきたのはヒカリ。

そして、

「ああ、やときたんか」

その奥、回転椅子をぐるりと回してこちらを見ている、水色の長い髪の毛をウェーブさせ、無地の黒いワンピースの上から丈の長い白衣を着た少女は、透き通る水色の瞳を煌かせ、ニヤリと人の悪そうな笑みを浮かべていた。

彼女の名前は、七星水練。

唄の仕事上のパートナーで、自称天才ハッカー。

学校に通っていない不登校少女なのに、パソコンの知識だけは豊
富である彼女は、今日もキーボードから手を離していなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6512y/>

彼方へ届く、幻想曲。

2012年1月14日18時52分発行